

武蔵野美術大学建築学科・日月会

フォルマ・フォロ

Oct. 1, 2000

vol.1 創刊号

# Forma-Foro



## 目次

フォルマ・フォロ エッセイ

竹山 実

インタビュー

芦原義信

卒業生の素顔

倉本たつひこ

VOICES /  
アビタ戸祭

更田邦彦

TOPICS /  
建築祭と日月会建築賞

青山恭之

製図室 /  
Looking for Public  
Realm Workshop

清水隆之

表紙写真：

武蔵野美術大学 アトリ工棟

写真提供：新建築写真部



## 大きな輪を描く一石に

竹山 実 TAKEYAMA, Minoru

武蔵野美術大学教授

『武蔵美の卒業生は総じてどこか違う。目が利き、手は早い、一人で頑張り向こう見ずなのが多い…』武蔵美の卒業生を実務に採用している同業の仲間から、こうした類の遠慮のないコメントを耳にすることがある。もちろん個人差のほうが大きいに決まっているものの、人は何かと、人の才能を枠にはめて解釈しがちなものだ。とはいえこれは、まんざら見当違いではないかも知れない。

教える側でも、長いこと一体、武蔵美の建築科の特色とは何かということ、スタッフ各自で考え、時には激しく議論し、その結果、明快な解答は未だ定まらないまでも、実践の上でなんらかの差別化を志向してきた。何しろひとつの都市にこんなに数多く建築の学校が存在する国も珍しい。

学校の特色というのは、何よりもそこが作り出す人物脈脈の性状によって決まる。だからそれは在学生だけの問題ではなく、学校を離れた卒業生のその後の姿勢や行動に負うところも大きい。とすると、卒業生自身がそれぞれの意識や行動のなかで、自分の育ったところを時折顧みること、決して無駄ではない。それどころか、母校と在学生の事を気にすることは、自分自身にとって前向きな志向性の表れになるだろう。不思議なことに、いままでそうした交流の機会が存在していなかった。

今回、日月会の人たちが集まり、ここにメディアが誕生した。「フォルマ・フォロ」(形の広場)と名づけられた。やはり目と手にこだわり続けるのだろう。それはそれで結構。

願わくば、このメディアが、始めは小ぶりでも、やがて、武蔵美の内と外に、幾重にも大きな輪を描く一石になって欲しい。

## 建築との出会い

芦原 義信 ASHIHARA, Yoshinobu

武蔵野美術大学 名誉教授

今日はひとつ、先生が建築と出会われた頃のお話と、武蔵野美術大の建築学科を創設された頃のお話の二つをお聞きしたいと思います。まず建築を始められたきっかけがありましたら、お話しいただけますか。

芦原：私の家には、何となく芸術家が多くてね。母の弟が藤田嗣治というフランスで活躍した絵描きだったり、母方のいとこが小山内薫という演出家とかね。父方の方は医者、江戸時代から医者をやっておりまして、父も医者をやっておりました。それで、医者と芸術の間みたいのとは何かないかと思ひまして。建築はいいじゃないかと。私が建築家となって建築やっているうちに、私の家族では建築をする者が急に増えましてね。息子も建築家になったし、孫も今、東大の建築科に行ってますし、急に建築家が増えちゃった。

お入りになった帝国大学で建築学科におられた先生方というのは、どんな方々でしたか。

芦原：まあ計画系は岸田日出刀先生っていう、もうお亡くなりになっちゃいましたけど、有名な先生でした。それから、建築史の方は藤島玄治郎先生っていう、まだ生きてらして、101歳ぐらいですね。御長命な方で、大変愉快な方で、この方の建築史の講義を聞いたとき、「諸君、えーギリシャに行って、アテネのアクロポリスの丘に登ってパルテノンの神殿を見なきゃ建築家になれんぞ」って言われてね。(笑)この間も藤島先生の100歳のお祝の会がありまして、僕に挨拶しろって言うんで挨拶しましたけど。

帝大を出られ、戦争にあって、それからハーバードへ入られたんですね。

芦原：ハーバードはね、戦後第1回の建築学科の留学生として行きました。ハーバードはその前の年まで、グロピウス先生がいたんですけど、行った時にはもう辞めておられて、次の大先生がこない、ちょうど間の一年間だったんですね。まあ、ハーバードってことですね。(笑)ハーバードが終わってからは、マルセル・ブロイヤーのところへ行って、一年間使ってくれないかって言ったところ、いいよって言われましてね。それで、一年間ブロイヤーのところでお働かせていただきました。



ブロイヤーの事務所では、どんなお仕事をされましたか。

芦原：まあ、いろんな設計をやりましたけど、いずれもドラフトっていうか、まあ、図面書きですね。

なにか、覚えていらっしゃるんですか。その当時書いたものを…

芦原：忘れちゃったよ。

ブロイヤーのところに勤められて、その後また、奨学金を取られて旅行されましたね。

芦原：ロックフェラー財団に申請しましてね。ぜひヨーロッパへ行きたいといって奨学金をいただきました。それで、叔父の藤田嗣治が住んでいたパリを中心に、主としてイタリア、あの辺を見て回りました。



そのご旅行で特に印象に残ったことは？

芦原： イタリアのシエナとかシエナの南にサンジミニャーノという非常にきれいな街があります。城壁がずっとありまして、日本みたいに、一軒、また一軒と散発的に街が出来たんじゃなくて、中心に向かって、収斂的に都市計画をしている。中心には必ず、広場がありまして、教会があります。実際に行ってみると石の広場で木が一本もないんですね。全く石だけの空間。初めて見まして非常にびっくりしたとともに、非常に感銘しました。そして、窓がずっと広場に向かって開いているから、建物の外側は広場の内側になるんですね。そこでシエナの場合は、バリオっていう競馬みたいなものが年一回行われる。窓という窓からみんなが見ると、今まで外部だった空間が一つのアリーナになっちゃう。内部になっちゃう。おーこれは内部と外部が転換するんだなあ、面白い空間だなあと。我々日本人の考えている都市空間とは本当に違う空間があるのにびっくりしました。

ヨーロッパから帰られてすぐに中央公論のビルの設計が始まるんですか。

芦原： ええ。留学して帰ってきて仕事がなく、丸ビルあたりを見て歩いていた時に、中央公論の栗本さんという、兄の芦原英了が婦人公論の編集長をやっていた関係で、栗本さんを知ってたんですね。それが、あっ、お前何してんだって。それでアメリカに留学して建築勉強してきたけどすることないんで、うろろろしてるんですって。すると実は、中央公論は京橋に新しいビルを建てるんだよ。お前、それじゃ案出してってくれて。もしよかったら採用してやるって。それからは徹夜、徹夜で案をつくって持って行ったんですね。おっ、これはいいや。じゃ、これを採用するよっていうことで、中央公論ビルを生まれて初めてやらせていた

いたんです。

そうしますと、それが処女作になるわけですね。

芦原： そう。それが、今回はよいよ壊すっていうんでね。この間、お別れに行ってきたんですよ。

壊されちゃうんですか。なんて、残念な…。

(中央公論ビルは既に解体されました。編集部注)

それでは次に、ムサビとの出会いのお話に入りたいんです。武蔵野美術大学の建築学科が出来たのが1965年ですが、先生が事務所を始められて多分5、6年後ぐらいでしょうか。

芦原： そうですね。武蔵野美大の理事長(故田中誠治)さんとどっかで目にかかってね。それでムサビに建築を教えるに来てくれと言われてましてね。私は建築家ですから、建物を設計させてくれるんだったら行きますけどと言ったら、じゃやんなさいよって言われて。そして、あのアトリエ棟などを設計させていただいた。



中央公論本社ビル

撮影：相原 功

その当時、ムサビの建築学科をどういうふうにしようとお考えになったのでしょうか。どこかで、ムサビはハーバード式の建築教育だと聞いたことがあるのですが。

芦原： ハーバード式っていうのは、日本では建築はふつう工学部にあるんです。アメリカでは工学部じゃなくて美術学部の中にあって、非常にデザインとか、設計なんかを重視している。ただ日本の場合は地震があるものですからね。東大でも東工大でも構造力学が中心で、デザインはそれにくっついていような感じなんですけどね。そうじゃなくて、アメリカのハーバードやイエールでは、デザインを中心に教育している。そういう学科を作ってみました。

建築学科ができた当時、先生方を探してきたのは全て芦原先生と聞いてますが。

芦原： そう、全部自分で引っ張ってきたの。寺田先生をはじめね、私がよく知っている人を連れてきた。その後どうなっているかは知らないけど。(笑)保坂先生もいたな。竹山先生、織本先生、犬塚先生。

磯崎さんは？

芦原： 磯崎さんもきてた。ああいう変わった人もいないとね。(笑)

最後にこれからの建築教育についてお考えがありましたら、お聞きしたいのですが。

芦原： そうですね。日本の都市は、ヨーロッパやアメリカと違って乱雑な都市で、なかなか都市計画的なことは出来ないけども、やはり建築学科でも全体計画っていうか、都市計画的なことを考えながら、一つ一つを計画できるといいですけど。これは言うのはやさしいけども、なかなか実際は難しいけどね。

長らくありがとうございました。

芦原： どうも、ゆきとどきませんで。



## 建築は懲りない業?!

倉本たつひこ KURAMOTO, Tatsuhiko

1回生 道都大学教授

私が上野駅に降り立ったのは、1964年(昭和39年)のことでした。家族などに見送られ、青函連絡船を乗り継ぎ、丸一日はかかったでしょうか。同級生は、とても大人に見えました。事実、倶楽部で最初についたあだ名が「坊や」でしたから、学生服姿の私は幼く見えたに違いありません。建築学科の新入生が集められ、自己紹介をした日のこと、好きな建築家の名前を皆が口にしました。「白井晟一」と言った学生もいました。私は、近所の大工の名以外一人も知りませんでしたし、建築家と言う職業自体、明確にイメージしていませんでしたから、尊敬の眼差しで眺めていました。最初の授業の鉛筆デッサンでもそうでした。彼らは天才です。私のはどう見ても漫画でした。スパゲティもハンバーグも、新宿で初めて口にしました。そして、4年間の過ぎました。

私が武蔵野美大建築学科を受験することにした理由は、高校一年に溯ります。工作好きや親の普請道楽までたどれば、幼い頃までになりますが、直接的には野球に興じて骨折したことです。かなりの重症で、スポーツは一



ばあちゃんち 1972

年程できませんでした。運動部から美術部に、ここが分かれ目だった気がします。商社マンになって海外に行きたいと思っていた気持ちも、茶室を造る棟梁の話に、自分の将来を重ねるようになりました。茶室を設計するには、工学部ではなく、美大に入らなければいけないと思った訳です。

4年の時、竹山実先生に師事しました。仲間はとても優秀で、私を少し利口にしてくれました。現武蔵美の相沢教授もその一人です。竹山先生は何から何までかっこ良く、見たこともない新鮮な世界に、わくわくしたものです。卒業設計の講習会を欠席し、欧州に旅行にいきました。テープレコーダーに設計の解説を入れていったのですが、不謹慎と叱られました。当時の海外旅行は贅沢なものでしたから、騙されて出費した親にはかなりの負担であったろうと、同世代の子供を持つようになってから知りました。反省しました。

私は反省と後悔ばかりしています。でも家人や知人は、「好きなことばかりして」と言うの

です。まともな建築家、いや、まともに見える建築家になるまでのことも、そう思われていません。卒業後数カ月、設計事務所に籍を置かせてもらい、その秋には結婚し、その後、ニセコの山でロッジを経営し、経営が行き詰まると設計事務所をはじめ、飽きると、生まれてまもない子供たちを連れて、ネパールに暮らしまし



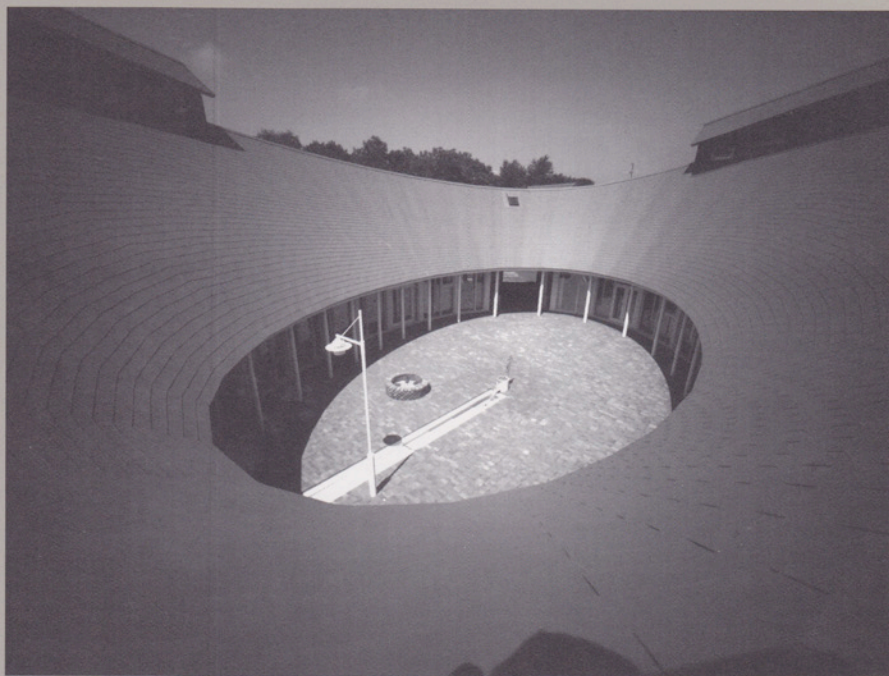
旧たくんち 1983



た。そこの大学で教え、アフガニスタンまで放浪し、帰国して、また事務所をはじめ。やっぱり「好きなことばかりして」ということになるのかしらね。子供たちも親の後追いの風来坊で、「親が親だから」と家人に叱られています。

私は学生たちにこう言っています。「おまーら、就職超氷河期でいいなー。その上円高。親を騙して海外に行けるよなー」と。でも彼らは、濃紺の背広で、「御社は」などとハウスメーカーを受けまくる。いや本当はそれが正道なのです。ただこういう時代に私が卒業を迎えたのなら、もっと自由だったような気がして、悔しがつているのです。ある建築雑誌の企画で、「老後はどうしています？」と言うアンケートがあって、「死ぬまで現役」とか「製図板の上にバツタリと伏して息絶える」とかある答えの中で、私の答えは「早く隠居したい」でした。最近書いたエッセイも「老後は洋上マンションで」とか「隠居の村」とか「沖縄移住計画」とかなのです。この年になっても放浪癖が直らないようです。困ったものです。

ところで初心の茶室の設計は、どうなってしまったのでしょうか。これまで茶室を設計したことはありません。円熟期になればと思うのですが、たぶん創らないでしょう。精神論的建築には、今は興味が無いのです。おおらかな、あっけらかんとした、間の抜けたような建築を造りたいと密かに思っているのです。これは吹き抜け空間とか広々とした大空間とかのことではありません。雨露しのぐ室内があって、囲われた外部があって、水路と草木があるそんな建物です。私の活動している北海道の建築は、自然環境に対して飽くなき防御の建築です。それが、北国らしい雰囲気を作りだしているのも確かですが、それももう飽きました。と、触れて回っているのですが、この建築麻薬は、なかなか断ち切ることが難しいことも実のところ良く知っています。



鹿嶋町ビュアモルトクラブ 1998

昨日も建設現場に行きましたが、遠くから少しづつ建物の姿が見えてくると、何かわくわくしてきます。製材したての木の香りや大工の工具の音に、薬が回ってきて、もうたまらなく楽しいのです。私の仕事は、煉瓦を積み上げたり、下見板を張ったり、列柱を並べたりと、少しずつ姿を現すものですから、なおさら現場は魅力的なのです。こんな具合に、矛盾と、反省と、後悔の日々はまだ続くのでしょうか。建築家とは懲りない業のようです。

## 同級生の眼

宮下 勇 MIYASHITA, Isamu

1回生 武蔵野美術大学教授

倉本さんのことで印象的といえば、卒業設計の講評会で本人不在のままカセットデッキ

だけがおかれ、「…ぼくは今オーストリアにいます。ぼくの作品は…」が流れたとき、びっくりしました。おどろきましたが、そうかこういうのもあるな、さすがムサビと思った記憶があります。それから数年後、ぼくが北海道の現場に通い始めたころ、彼の家に度々泊ってもらいました。ふたりの赤ちゃんが泣いていました。夫妻のもてなしをうけ、ここちよい家庭、生活がそこにあるなど感じたものでした。そのころ彼は独立し、自分の道を歩き始めていたと思います。それぞれにその時代の夫妻の生活が表出しています。家具、器、タペストリー、料理、空間の隅々に、日々の暮らしがそこにあり、その生活そのままが作品となり、結実しています。彼ら夫妻の暮らしそのものが、作品だと思っています。そうありがたいものです。



## アビタ戸祭 連続する戸建て住宅

更田 邦彦 FUKETA, Kunihiko

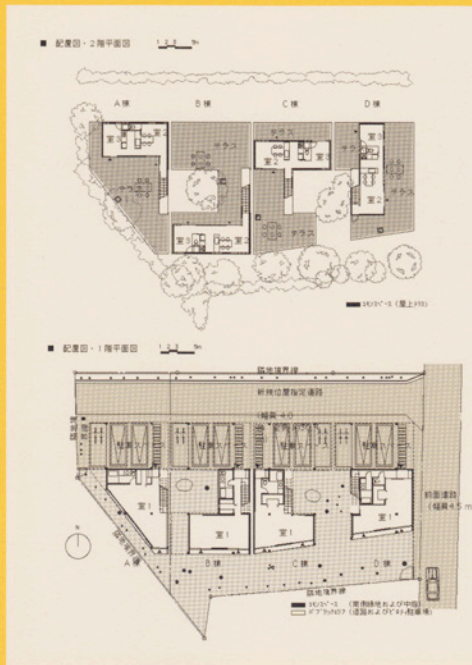
16回生 更田邦彦建築研究所

長い間誰も住まなくなって放置されていた私の実家を、数軒の賃貸住宅として建替えるべく、その基本設計を開始したのは1998年12月のことでした。以前からコンペなどを通して、勉強会?のようなことをしてきた岩岡竜夫氏(16回生 現東海大学助教授)と岩下泰三氏(15回生 現スペースラボ主宰・武蔵美建築学科非常勤講師)の協力を得て、それまで考えてきた、“連続することで生まれるシステムとその展開”といったことを形にしていこうと、3人(1+α)で議論を進めてゆきました。

その過程において課題となったことは、敷地内の木々によって育まれた住環境をできる限り壊さず、全体が一体となり、各戸が連続しながらもそれぞれがプライバシーを保ち、いかにその環境を享受しうるものにできるかということでした。建物の規模は、建蔽率・容積率ともに50%程度とした4戸の低層住宅としました。それによって生まれる外部空間をどのように連続展開していくかがスタディの中心となりました。そしてそれらの建て方を、共同住宅形式ではなく戸建て形式としたことで、これまでの戸建て形式による縦割りの住環境というものを見直すことができ、建物の作られ方による合理的な提案がより明確に打ち出せたと思います。

従来の縦割り戸建て形式の住環境について、我々が見直そうとした事項は次のようなことでした。

- 1) 敷地境界線により外部空間も分断され、住環境が連続し共有されることがない。
- 2) プライベートエリアが確保されているよう



- されていない。
- 3) コモンスペースとして使われるような場所がない。
  - 4) 建物の裏表がはっきりしていて、建物どうしの向き合い方が、裏/表の関係になりやすい。
- これに対し、今回の計画で具体的に提案した点は次のようなことです。
- 1) 全戸を連続させる人工地盤の様なテラスを設定する。
  - 2) 敷地境界線は設定するが、敷地を区分するものは設置しない。
  - 3) 1階は隣家に対してできるだけ閉じるように、また距離をとるように作る。2階の建物はずらしながら、そして階段室の斜の壁によってお互いの視線をほどよく遮断するように配置する。
  - 4) 2階の建物以外の部分に十分な広さを確

- 保し、各戸専用のオープンテラスとすると同時に、コモンスペースとして利用可能な場所とする。
- 5) 2階建物の平側の外壁は、恒久的な外壁材としてガラスを使うが、それは建物の表裏の表情を作らないためのデザイン要素となっている。

幸いにも、これらの提案をまとめた計案案が1999年のSDレビューに入選し、いくつかの場で発表する機会を得ました。そのような経緯もあったせいかそれらの提案は着実に実現へと向かい、できあがった住宅群は、戸建てでありながらも全体が一つであるような、強く緩やかな連続性と一体感を作り得たように思います。この強くて緩やかな形式の中で、今後長い時間をかけて作られてゆくそこでの“住まい方”が、この「アビタ戸祭」というプロジェクトの答えになってゆくのだと考えています。





## 「建築祭1999-2000 第一回学生作品展」と「日月会建築賞」

青山恭之 AOYAMA, Yasuyuki  
14回生 アトリエリング

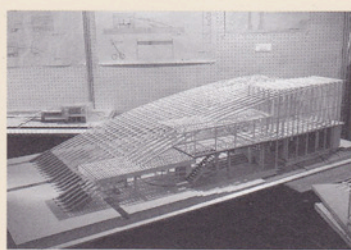
武蔵野美術大学では、「建築祭」と呼ぶ学生の作品展が2000年から始まりました。「建築祭1999-2000 第一回学生作品展」は、建築祭実行委員会の主催、日月会の協力のもとで、1学年から3学年、4学年(卒業制作)と大学院生(修士制作)の作品をそれぞれ一同に展示する学生の作品展です。その内、1学年から3学年までの作品展は、2000年1月12日(水)から16日(日)までの5日間にわたり開催されました。また、「卒業、修士制作展」は1月28日～30日の期間に開催されました。卒業、修士制作については、以前から建築学科にかぎらず、全学的に展示されていましたが、学部の学生の作品が一同に展示されるのは、今回の「建築祭」が初めてです。

1学年から3学年までの作品展の1月13日には、レビューと称して、それぞれの課題を指導した専任教員、非常勤講師と学生とが一同に会して、学生達の作品を巡る自由なディスカッションがおこなわれました。同じく13日には、「日月会建築賞」の授賞式もおこなわれました。「日月会建築賞」は、今年から始まった学部3学年の作品を対象とした建築賞です。授賞式のあとは、学生と講師、卒業生らが一同に会して楽しむパーティーがおこなわれ、建築祭として大変盛り上がりしました。また1月14日には、ゲスト(今回はトム・ヘネガン氏)によるフォーラムが開催されるなど学生の作品展を核として、まさに、建・築・祭というにふさわしい多彩な催しがおこなわれました。

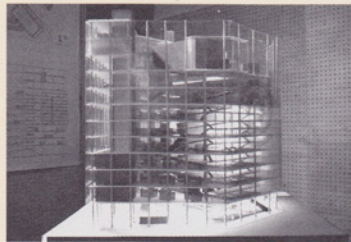
「建築祭」は、学内にとどまらず外部にも開

かれており、会期中は他大学の学生、関係者は自由に展示を見たり、フォーラムに参加することができます。こうした試みは、ムサビの建築学科の学生にとって、学年に係わりなく相互に作品が見ることができる貴重な学習の場となるとともに、日月会会員などの卒業生、更には他大学の学生など、外部の建築関係者と交流できる貴重な場ともなっています。この「建築祭・学生作品展」は来年(2001年)の1月にも今年同様に開催される予定です。この作品展が更に充実して、実りの多い催しとなることが期待されます。

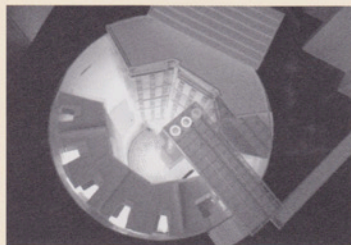
次に「日月会建築賞」ですが、かねてより日月会では、将来性のある優秀な学生に対して、独自に賞を授与したいと考えておりました。今



太陽賞作品



満月賞作品



三日賞作品

回、賞の創設に当たり、卒業制作に対しては研究室、大学双方から賞が授与されていることから、対象を、作品展に展示されている3学年の後期課題としました。「日月会建築賞」では、四つの賞を設定し、各賞は、日月会にちなんで、太陽賞(最優秀)、満月賞、三日月賞、新月賞と名付けました。

今回の第一回日月会建築賞の選考は、11回生の井上揺子さんを委員長として、横島啓介さん、澤田忠夫さん、小宮功さん、及び日月会役員(須藤、青山)からなる選考委員によっておこなわれました。選考はレビューの日に合わせ、各委員による公正なる選考の結果、太陽賞には保坂コースのCグループ(百武宏明、岡崎洋平、福島学、本田一実)、満月賞には竹山コースのDグループ(内海聡、鈴木啓史、杉江智)、三日月賞には竹山コースのEグループ(斉藤真、星野勇氣、鈴木哲郎)、新月賞には源コースの木村顕君を選びました。太陽賞に選ばれた保坂コースCグループの作品は、課題である「集合住宅の交流施設」を、1/10の架構模型で表現したもので、その形態がとりわけ目を引き、模型の完成度と合まって、太陽賞(最優秀賞)に選ばれました。授賞セレモニーは同日の夕方よりおこなわれ、日月会会長から各該当者に賞状と記念品が授与されました。

「日月会建築賞」は、同窓会である日月会が、大学での学生の活動に対して、直接的にかかわる最初の試みでした。結果的には、学生、建築学科研究室の双方から、おおむね好感を持って受け入れられたと思います。日月会では今後も、学生、建築学科研究室、双方との交流を深める企画をいろいろと検討しています。

尚、来年「建築祭・学生作品展」期間中の2001年1月13日(土)には、日月会の総会を大学にておこなう予定です。



## Looking for Public Realm Workshop

清水隆之 SHIMIZU, Takayuki  
武蔵野美術大学大学院

建築学科では、6月4日から9日まで1週間にわたり、カナダのBritish Columbia大学からJerzy Wojtowicz教授を招き、ワークショップが開かれた。教授は世界の数都市で同様のワークショップを行っており、本校での試みは2年前の企画に続き二度目となる。

今回、Looking for Public Realmツアーに参加したのは、学部4年生と大学院生の有志達20名。教授と僕は、デジタルメディアが記録する東京の未来に近づこうとする。未来への鍵となるのは、教授曰く「モンタージュ」である。

モンタージュの手法は、特別新しいものではない。Jerzy教授はワークショップを開くにあたり、エイゼンシュタインの映画「戦艦ポチョムキン」を取り上げ、モンタージュについて説明された。モンタージュとは、フィルムの前後で2つの異なる脈略の映像が交互に繋がることにより、映像に第三の意味が相乗されていく手法であるという。デジタルメディアの特徴はマルチメディアにあり、異なる媒体で記録されたモノ達をコンピューターで一つに繋ぎあわせることにある。バラバラなものを繋ぐ時、デジタルメディアとモンタージュは相性



Jerzy Wojtowicz

ぴったりなのだ。

デジタルメディアが記録した都市の細切れをモンタージュする。アキハバラと童謡、歌舞伎町と雅楽、浅草と古事記をつなぐこと、こうもり傘とミシガが手術台の上で・・・である。モンタージュが獲得する第三の意味が、見えない「東京」であり、見えない「未来」である。もし、僕達が東京の未来を発見するならば、public realm(新大陸)の発見者として新しい世界を築くこととなるだろう。さっそく学生達は、3、4人のグループに分かれ、デジカメを持って町へ出た。翌日からはJerzy教授の指導のもと、編集作業が行われた。

8日にJerzy教授が行った講演会では、教授が実践しているデジタル設計を知ることとなった。動画や音楽など、他のメディアを積極的に設計の核の部分にまで持ち込むことで、設計作業とは剥離しないデジタル・プレゼンテーションを実現できていると思えた。映像やサインを交えるプレゼンテーションは、新鮮であると同時に、教授がワークショップを通して言いたかったことを少しは理解できたと思う。少なくとも僕には、慣れない英語の会話よりもずっと分かりやすかった。また以前NHKで取り上げられた、チリ、カナダ、日本の三つの大学を結んだワークショップの様子も放映された。そこでは三つの大学をインターネットでつなげ、離れていながら、共同で一つの作品をつくるのが試されていた。今回は残念ながら、同様の試みを実行することはできなかったが、近い将来、世界の学校との国境を越えた共同設計が実現できるだろう。

ワークショップの成果は、ホームページと後日出来上がるCD-ROMとに収められる。今回は期間が短かったこともあり、消化不良の感も否めなかったが、Jerzy教授の華麗なコンピューター捌きに、学生達はすっかり魅了されてしまったようである。

◎ジャンカとチェメント(Cemento)。会報の名称として最終審査まで残ったのは、このふたつ。いまひとつスマートではないけど、面白い建築屋たちを結びつけるもの、そんなイメージ。ところが先生方からは大不評。結局はもうちょっとカッコつけて「フォルマ・フォロ」に落ち着いた。これは和製のイタリア造語である。何かしら「かたち」と関わることを業としている卒業生達の「集う場所」であり「発信の場所」でもある。(「foro」にはフォーラムの意味と伝達の意味がある。)さて、第一声の成果はいかに? ◎巻頭メッセージに御登場いただいた竹山実先生は最近新しい本を出版された。「竹山実建築録」(六耀社刊) ◎「VOICES」では卒業生達の近況を紹介していく予定。年齢・分野・国内外問わず、自分こそこんなユニークなことをやっているぞとお思いの方、ぜひご投稿を。 ◎卒業以来ほとんど大学とは縁がなく、一度卒業証明書を取りに行っただけであったのに、独立してふらふらしていると大学に呼ばれて非常勤講師に。と思ったら日月会のリニューアル委員会を手伝うことになって、会報をつくるから頼むね、ですって?! いつの間にかDTPソフトと悪戦苦闘の日々。誰か手伝って下さいませ。以下求人情報なり。編集スタッフ募集!! 年齢性別不問。Mac経験者求む。(QuorkExpress,Photoshop等)無給。(M.H.)

フォルマ・フォロ  
創刊号Vol.1 2000.10.1

編集：林 美樹、須藤和由、青山恭之、  
清水隆之、渡辺英二  
デザインフォーマット：矢萩喜俊郎

印刷：株式会社 帆風  
発行：武蔵野美術大学建築学科同窓会・日月会  
<http://www.nichigetsu.org>  
東京都小平市小川町1-736  
武蔵野美術大学建築学科研究室内